■新本庁舎建設基本設計者審査委員会を設置

市では新本庁舎建設の基本設計業務を発注するにあたり、設計者を選定するため、「安曇野市新本庁舎建設基本設計者審査委員会」を設置し、4月19日、委員の委嘱および第1回委員会を南安曇教育文化会館で開催しました。

委員は、学識経験者や市民8人からなり、昨年12月に策定した「安曇野市本庁舎等建設基本計画」に基づき、創造性、技術力などを審査します。

受託業者の選定方法は公募によるプロポーザル方式を採用し、4月20日に実施要領を公告、2回の審査を経て6月30日に決定します。

委員長に就任した早稲田大学の古谷誠章（ふるやのぶあき）教授は、「公共施設の設計に携わった経験を活かし、設計者がやる気と誇りの持てる仕事となるよう選考をしていきたい」とあいさつしました。なお、各審査などは公開で行われます。

詳しくは、市ホームページなどで順次お知らせします。

あいさつをする古谷委員長（写真中央）

■「安曇野エッセイ賞」最優秀賞受賞者に賞状

合併5周年の記念事業として募集した「安曇野エッセイ賞」。最優秀賞を受賞した齋藤信夫さん（66歳　北海道函館市）が4月15日、市庁舎を訪れ村上副市長から賞状を受け取りました。埼玉県出身の齋藤さんは元新聞記者で、昭和51年から3年余り、全国紙の松本支局に勤務していました。取材の傍ら穂高などを訪れた際、「山々が身近に迫ってきてすごい所だな―」と、当時の安曇野への印象を振り返りました。

最優秀賞を受賞した「あずさ1号」は、新婚時代の安曇野の思い出と、長女に「あずさ」と名付けたいきさつを折り込んだ作品で、「わが子に名をつけた、安曇野を愛する本気度が評価されたのだと思う。北アルプスと平野部のコントラストが素晴らしく、いやしの場となる。いつか娘と一緒に安曇野を訪れたいです」と、あらためて受賞の喜びを話しました。

エッセイ賞のその他の結果は次のとおりです。受賞作品は市ホームページに全文を掲載しています。

▽優秀賞「心の隠れ里、安曇野」榊（さかき）まさ子さん（53歳　東京都大田区）▽優秀賞「安曇野育ち」林沙耶（さや）さん（18歳　安曇野市豊科田沢）▽奨励賞「春はあけぼの」埜辺綾香（のべあやか）さん（13歳　大阪府交野市（かたのし））

受賞の喜びを語る齋藤信夫さん

「安曇野エッセイ賞」最優秀賞受賞作

あずさ1号

北海道函館市
齋藤信夫 66歳

「おい、女の子が生まれたら名前は絶対、『あずさ』にするぞ」――。

妻から妊娠を告げられた時、私はその名前をなぜか告げていた。妻はキョトンとして、「何を言ってるの。この人は」みたいな目付きでこちらを眺めていた。少し時間がたった後で「いいだろう」と念を押すと、「いいわよ」とまんざらでもなさそうだった。1976年（昭和五十一年）暮れのことである。私たち夫婦は松本で新婚生活を送っていた。

「あずさ」という名前を心に温めていたのはこの年の二月、北海道から赴任して来て、勤めていた新聞社の取材で上高地や安曇野を時々訪れ、山と川の美しさに強く魅かれていたからである。この世のものとは思えない大正池の風景を初めて見た時は、時を忘れてしばし、見とれてしまった。

関東平野のど真ん中にある田舎の町に育った私の周りでは、小さい頃から山や海はまったく無縁。別世界の風景だったので、いっそう感銘が深かったのかもしれない。

「あずさ」という名は、本物の梓川の美しさもさることながら、名前自体に清楚でかわいい響きがあるように思えた。

たまの休日には、車を駆って上高地や安曇野へドライブに出かけた。妻のふるさとは北海道で、ただひとり遠い地に嫁いできた寂しさを紛らわしてやるためだった。梓川の河原をブラブラしたり、山で野草を取ったり、わさび田で時を過ごしたりした。

何かある目的があってそこへ出かけるのではなく、「そこにいること」の心地よさが安曇野の風景の中にはあった。雄雄しく迫ってくる北アルプスの山並みと日本の原風景ともいえるやさしい雰囲気の平野部。この絶妙なコントラストが日ごろ、仕事に家事にと、気を使っていて疲れていた私たちの心の癒やしの場となった。

田んぼや畑のあちこちの隅で静かに微笑んでいる道祖神も北海道生れの妻には珍しかった。「ほら、二人仲良く手をつないでいるでしょう。けんかばかりしていると道祖神に笑われるよ」

道祖神にかこつけて、強情張りで折れるのが嫌いな若い二人が「お互いに謙虚の心を持ちましょう」との意味を込めて妻がつぶやくように言った。翌年の夏、初めての子が生まれ、女の子だった。早速、かねての決意通り「あずさ」と命名した。

その頃ちょうど、兄弟デュオ、狩人が歌う「あずさ2号」が大ヒットし、テレビやラジオから、毎日のように曲が街に流れていた。友達や親戚からの祝福の電話や手紙の最後に「あの歌にあやかったの？」との文字や声が必ず添えられた。いちいち反論していても疲れるので「そうだよ」と聞き流していた。だが、心の中では叫んでいた。

「本家はこっちなのだ。一年も前から決まっていたのだ。こっちはあずさ1号だ！」と――。

小学生のころ、「あずさ2号」と、友達から、からかわれていた長女も今年で三十三歳になり、春には夫婦にとって初めての孫も誕生した。私たちは、長女と共に安曇野とは生涯、縁が切れない。

「そこにいること」の心地よさが安曇野の風景の中にはあった。